



無駄なことから見えてきた」と

イタリア交響楽団のコンサートを聴きに久しぶりに札幌コンサートホールキタラを訪れた。中でもイアン・クルパンが奏でるモーツアルトピアノ協奏曲第20番の演奏が圧巻だった。

さて、私は大学に入学するとほぼ同時に管弦楽部に入部した。高校時代は寮生活をしていた関係からヴァイオリンを練習する場所もなく、せめて大学に入学した後は少しずつ真面目にヴァイオリンを弾こうと心のどこかで思っていた。管弦楽部の音楽監督は小松一彦先生であった。私の大学在籍中、小松先生は札幌交響楽団の専任指揮者と聞いていたが、そういうポジションが当時の札幌交響楽団にあつたかどうかは分からぬ。

春の合宿は山中湖、夏の合宿は志賀高原で行っていた。志賀高原では、雪のないスキー場の下から上まで駆け上がるなどしていたが、ヴァイオリン弾きとして合理的な練習であつたかどうかは定かではない。なお志賀高原の合宿先であったホテルジャパン志賀は、天皇陛下が所属されていた学習院大学の管弦楽部の合宿先で

さして2年生になり、周りの視線を感じつ何となく次期コンサートマスター候補となつた後は、先輩のコンマスの助言もあって大学の講義には出なくなつた。朝9時頃から夜9時頃まで練習会場の中や外にいて、アルバイトもできずにスコア片手に全ての楽器の練習を眺めていた。そして、シンガポールでの海外演奏旅行も終わり帰国してしばらくして、いよいよコンサートマスターとしての1年が始まった。母校・中央大学が創立100周年を迎えたこともあつて、例年に比べて約2倍の演奏会が準備されていた。

シベリウスの交響詩「フィンランディア」の練習の際、小松先生から「幸せな日本人」「豊かなニッポン」を忘れないなどと教えられ、音に気持ちをのせたつもりであつたが、「裕福な日本人」と揶揄された。その後、音楽史を学びに大学図書館にこもるようになつた。アルバイトもせずに「精進潔斎」などと念仏のように唱えながら練習ばかりしていた。当然、仕送りのお金も底をつけ、ヴァイオリンのガット弦が切れても買うことができず、先輩から弦を譲つてもらつたこと、数回あつた。そして、最後の定期演奏会のメインは、アントン・ブルックナーの交響曲第8番（ノヴァーク版）となつた。任期途中からどんどん身体が痩せていくのが分かつた。大学生活のオケである以上、楽団員の目的意識は一致していない。勉強中心で時間を見つけてクラシックができるほどと考えている学生や、逆に、小学生から吹奏楽部に所属し続け、社会人となる最後の4年間で集大成を飾りたいという学生も数多くいた。他方、小松先生からは、「強いパッション」と口並みの技術——、どちらかが欠けていたので、胃痛が続いた。

昭和60年11月下旬、定期演奏会前日のゲネプロを迎えた。大学時代、オケ一筋で留年までしてオケに参加していたチエロのじ先輩がゲネプロ終了後、私に駆け寄ってきた。「司、いよいよ明日が本番だ。明日くらいは音楽を楽しめ。」音楽は音を楽しむと書く。おまえが音を楽ししないで誰が音を楽しむんだ」と優しい言葉をかけてくれた。本番を迎えた頃の体重は46キログラム、目も吊り上がりついたのと思う。翌日、コンサートが終了し会場から拍手を頂くまでの間、私はオケのメンバー全員でひたすら音を楽しむことに集中した。その後、このコンサートのレコードは多くの後輩たちに聞き継がれないと聞くが、「先輩たちが命をかけて演奏している感じがして怖い」との印象が一番多いと聞く。

大学生活の2年間とはいえ、練習会場に1日中いる生活など無駄なことだつたかもしれない。練習会場にいる時間を長くすることで何かが見えてきたわけでもない。しかし、今ではこう考えている。「型破り」という言葉は、礼儀作法に則り「型」をしっかりと守り表現できる人だけが許されて忘れないなどと教えられ、音に気持ちをのせたつもりであつたが、「裕福な日本人」と揶揄された。その後、音楽史を学びに大学図書館にこもるようになつた。アルバイトもせずに「精進潔斎」などと念仏のように唱えながら練習ばかりしていた。当然、仕送りのお金も底をつけ、ヴァイオリンのガット弦が切れても買うことができず、先輩から弦を譲つてもらつたこと、数回あつた。そして、最後の定期演奏会のメインは、アントン・ブルックナーの交響曲第8番（ノヴァーク版）となつた。任期途中からどんどん身体が痩せていくのが分かつた。大学生活のオケである以上、楽団員の目的意識は一致していない。勉強中心で時間を見つけてクラシックができるほどと考えている学生や、逆に、小学生から吹奏楽部に所属し続け、社会人となる最後の4年間で集大成を飾りたいという学生も数多くいた。他方、小松先生からは、「強いパッション」と口並みの技術——、どちらかが欠けていたので、胃痛が続いた。

昭和60年11月下旬、定期演奏会前日のゲネプロを迎えた。大学時代、オケ一筋で留年までしてオケに参加していたチエロのじ先輩がゲネプロ終了後、私に駆け寄ってきた。「司、いよいよ明日が本番だ。明日くらいは音楽を楽しめ。」音楽は音を楽しむと書かれていたのかもしれない。